

報告②

東日本大震災における彫刻文化財の

被災後の対応と被災前の対策について

岡
田
靖

はじめに

- 一 震災直後の対応―情報発信の方針―
- 二 被災から二カ月後―石巻文化センター所蔵の文化財レスキュー―
- 三 震災から三カ月後―オーブンキャンパスでのディスカッションと未指定文化財への対応―
- 四 震災から三年後―宮城県東松島市月浜地区―
- 五 震災から一カ月後―五年後―山形県高島町玉籠院―
- 六 震災から二年六カ月後 山形県高島町の某堂
- 七 震災から八年後―岩手県陸前高田市立博物館―

まとめ

はじめに

最初に自己紹介をさせていただきます。一般社団法人木文研というのは、自分で立ち上げた会社で〔編者注…岡田氏が代表理事〕、名古屋市長東区に拠点を置いて活動しています。帝京大学文化財研究所には、この一〇月から着任したところで〔編者注…准教授〕、まだ三カ月も経っていないのでここでの活動はほとんどありませんが、今後はそこを拠点として活動します。

私の生まれは三河の蒲郡です。途中で名古屋に越してきました。三河で生まれて、名古屋で育ちました。ですから、名古屋も地元ということです。

木文研として独立したのは五年前です。それまでは山形の東北芸術工科大学〔芸工大〕で教員をしていました。その在職中に東日本大震災に遭遇しました。今日は、東北芸術工科大学で行った被災物件に対するレスキューの話を中心に、五年前から木文研として独立した後にも引き続き行っている被災文化財の対応についても話をさせていただきます。いただきたいと思います。

私の専門は木製品の文化財で、主に仏像の保存修復を専門としています。忘れもしない二〇一一年三月一日に東日本大震災が発生しました。その時私はちょうど大学にいて、大きな揺れを感じ、ただ事ではないと直感しました。学生は春休み中でしたが何人か登校していたので、まず彼らの安全の確認をしつつ、収蔵庫に文化財等が保管してあるのでそのチェックもしつつ、慌ただしく動いていました。その日は山形中が停電になってしまったので、真つ暗の中、学生をまず帰して、自分も遅くなつてから帰るといふ体験をしました。

停電していたので携帯で情報を集めていて、ワンセグなどで津波の状況を見て、信じられない思いをしていました。芸工大の学生たちの多くが仙台の方から来ているので、皆自分の実家を心配しながら、不安の中で一夜を過ぎました。

一 震災直後の対応―情報発信の方針―

震災直後、東北芸術工科大学の文化財保存修復研究センターとしては、まず緊急会議を開き、対応を協議しました。東日本大震災は広範囲に甚大な被害が出たということで、当然、最初にすべきことは人命救助で、その後文化財となるわけですが、あまりにも被害が広域過ぎて、情報収集も含めてかなり難航しました。我々としても、混乱している所に行って「助けます」と言ってもそれはありがた迷惑で、さらに混乱を引き起こすということがその前の中越地震の経験としてあったので、「何かあったら言ってください」とだけ情報発信して、状況が落ち着くまで待つ、要請が来るまで待つ、という対応をとることにしました。

当然、中央の方ではいろいろと動きが進み、文化庁を中心とした被災文化財等救援委員会が東京文化財研究所に事務局を置く形で立ち上がり、被災状況の確認または文化財レスキューの動きが始まりました。

二一 被災から二カ月後―石巻文化センター所蔵の文化財レスキュー―

津波で多くの被害が至る所で発生していました。その中でも震災から二カ月経った時に、私どもの東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターの方に連絡があったのが、石巻文化センターの被災文化財に関するレスキューでした。全国美術館会議もそちらの方で中心的に活動しており、文化庁の文化財等救援委員会と全国美術館会議の方から支援要請を受け、ゴールドデンウィーク前にうちのセンターとしても活動を開始しました。美術館関係の方々を中心となつて現場から作品をまず宮城県美術館に移送し、一時保管した文化財の応急処置ということで、我々も保存修復の専門家としてできることを協力させていただきました。ゴールドデンウィーク中にボランティアとして教員が参加して、学生も一部参加しました。

石巻文化センターはすぐ近くに日本製紙の工場があり、そこから大量のパルプが流出し、津波の海水と混じりあつた状態で同センターを襲いました。収蔵庫の中まで水が入り込み、海水に混じつたパルプが作品にこびりつくという特徴的な被害がありました。パルプなので当然水を含んだまま木製品の上に付くといつまで経つても乾きません。被災から二カ月たつたところで既にカビが生えていて、その処置を行うのが緊急に必要な作業でした。丁寧にパルプを取り、砂を取りという作業です。全体が海水に浸かっていたので、二カ月後でも、触るとしつとりしているという状況です。それを乾かしつつ、カビを抑制しないとまずいということで、応急的処置にすぎないのですが、そういう作業をもくもくで行いました。防腐剤等も噴霧してカビを抑制しつつ、木材の含水率を調べて、吸水性の高い紙で包んで、少しずつそれを取り替えながら水気を取っていく作業を行いました(写真1〜4)。その後、本

格的な修復が必要な物も多々あったので、それらは大学の研究教材として無償で受け、大学の主に卒論の研究という形で修復作業を行いました。

三 震災から三カ月後―オープンキャンパスでのディスカッションと未指定文化財への対応―

時系列で報告させていただきますが、震災から三カ月経ち、指定の文化財や公的な文化施設等の被災状況がほぼ判明した時点で、芸工大でオープンキャンパスを開き、震災についてディスカッションを行いました。その時に、芸工大のある学生から訴えがありました。その学生は実家がお寺で、福島の伊達市に実家がある。皆さんご存じの通り、福島第一原発が今回の津波で大きな被害をこうむりましたが、伊達市は原発からやや離れた所で、ホットスポットと呼ばれる、一部で放射線量が高いことが確認されている地域でした。だから全域の避難はなく、みなさんそのまま住んでいるのですが、所々で危険だと言われていました。直接的に被災を受けた所には救援があつたのですが、そういう間接的な被災地はほとんど救援がない。ましてや普通のお寺さんで、指定になつていない物をお奉りしているような所だと、費用面も含めて、調査にすら全く来ない。でも壊れている。どうしたらいいのだという訴えを受けました。

訴えをうけた我々教員たちで現地に行き、ガイガーカウンターで放射線量を測りつつ、調査をしました。建物等には大きな被害が出ていて、本尊の仏像も揺れによって倒壊していました。ここで一番問題に感じたのは風評被害

です。ホットスポットの所は確かに放射線量が高いのですが、このお寺自体は決して高くありません。でも全体が危ないというような風評被害が出ており、対応の中で考えさせられるものがありました。被災資料は、大学の研究資料として本格的な修復を行うことにしました。

四 震災から三年後―宮城県東松島市月浜地区―

次に、震災から三年後に、東北大学の平川先生〔编者注：平川新東北大学東北アジア研究センター教授〕からご相談をうけました。宮城県の東松島の沿岸地域にある、観音堂という小さなお堂にお奉りされている観音像が揺れによって崩壊したということでした。これは未指定物件で、直すとしても費用負担の支援が全くない。東京の修復工房に見積もりを依頼したところ、かなりの高額の数値で、普通に修復する場合だとそれぐらいかかる常識的な値段ではあるのですが、被災した所では払える額ではなく、困っているというご相談でした。私どもが大学として何ができるのかということ、まずは現地に赴きました。

写真5の左がそのお堂で、右がそこから見える光景です。ここには元々、家が建っていました。その向こうに海が見えます。低地の部分は全部津波にさらわれてなくなってしまうという状況です。観音堂はかろうじて高台なので助かったのですが、地面すれすれまで津波が来ていて、もう少しでさらわれるところでした（写真6）。

もう一つ特徴的なのが、このお堂のすぐ下に籠もり場があり、この地域に伝わる鳥追いの行事で「えんずのわり」というものがあります（写真6）。それは国の無形文化財に指定されている重要な祭事で、その時にこの観音像を

お参りしながら家々を回るといのが祭事の一環となりました。お像自体は未指定ですが、この国指定の無形文化財に関わるものであることが調査の中で分かってきました。

被災したお像は写真7のような状態で、全壊していました。台座の内側には修理銘があります。名古屋の仏壇屋さんが昭和に修理しているという記録があったのですが、昭和に修理していても、あれだけの揺れだと全壊してしまうのだという状況でした。被災から三年経った後に我々が依頼を受けたわけですが、何ができるのかを考えました。地域では所々で造成が始まっており、高台に新たに家を建て始めているところでした。ただ、多くの方々はまだ仮設住宅に住んでいる状況です。つまり、復興の最中なわけです。そこで我々は、現地で仮設住居の一部に造られた公民館をお借りして、現地で修復を行うことを考えました。実際に壊れたお像が、その地域で、その場で修復されていくのを、一般公開という形で皆さんに見ていただく。そのお像が直っていく姿と、町が復興していく姿を合わせて感じていただくことで、何かの力になれないかと考えました。

その風景が写真8です。費用に関しても、実はこのお堂を管理している神主の方が民宿を経営されていて、高台で被災を免れていたのです、「(修復の)お金は要りませんので、泊めてください。」ということ、学生と四人で行き、三泊四日で全修復を行うという形で対応させていただきました。

一般公開には、地元の方々は最初恥ずかしくてなかなか来ていただけなかつたのですが、最後の方に「どんなことをやってるの」と言つて来てくれました。ここでびつくりしたのが、これは地域のシンボリックなお像でもあるのですが、皆さんからは「こんなお像だったのか」という声が多く聞かれたことです。というのは、毎年拝んでいるはずですが、お堂の厨子の中にまつられていると、どういいうお像かちゃんと見ていないのです。そこにあるといふことが重要で、お像自体の形はよく分かっている。だから、この修復の機会に初めて見たと。そういうことが、

地域における仏像の一つの在り方として気付かされた点でもありました。実際に修復されて、皆さんで法要を行って完了しました(写真9)。この一連の修復活動によって、復興の一つの精神的な手助けになればいいと考えています。

五 震災から一カ月後〜五年後―山形県高畠町玉龍院―

次の事例は、一カ月後〜五年後という長い期間をかけて行われたものです。震災から一カ月後に、山形県内の被害状況調査をしました。その時に、高畠町玉龍院という、山形の南の方にある町の五百羅漢像をお奉りしているところで、揺れによる損傷が起きたことを確認しました。

土蔵づくりの羅漢堂の壁面にある複数段の壇上に五〇〇体の羅漢像と、中心には十六羅漢がまつられていたのですが、それが揺れによって落下するという被害状況でした。膠(にかわ)で組み寄せられた近世の仏像でしたので、落ちた拍子にばらばらになるという被害が発生していました(写真10〜12)。もちろん経年劣化で壊れていた部分もあるのですが、揺れによってさらにおうちをかけたという状況です。

こちらは、町の文化財指定を受けているお像ではあるのですが、数が数ですので、五〇〇体プラス十六羅漢像ということで、五〇〇以上を普通に修復するといくらかかるのかということになります。町の方でもなかなか援助は難しく、震災を契機にいろいろと予算繰りをして、ようやく五年後の二〇一六年に、東日本鉄道財団が補助金を出してくれるということで、それと町の助成とで修復を行うことになりました。私は既に本文研として独立した後で

したが、その業務を請けさせていただいて、二〇一六年には十六羅漢と二尊者、その次の年から五百羅漢像の修復と、現在でも行っています。二〇二〇年で一応、全体完了という状況までようやくなってきました。五〇〇体を名古屋の方へ運んでくるのもすごく大変だということもありますが、これもやはり現地で修復をすべきだろうと考えました。

まず二〇一六年に、本堂をお借りして十六羅漢像と二尊者像の修復を行いました。分解したり割れたり折れたりしたところを修復しつつ、クリーニングを行っていました。基本的には現状維持の処置ですが、写真13のような形になりました。2年度目からは五百羅漢像です。こちらも現地で修復を行ったのですが、現地に年間通って行うわけにもいかないので、一〇日間という期間を設定してまず一〇〇体をやってみようということで、スタッフとともにやってみたところ、一応一〇日間で一〇〇体を修復できたので、このペースであれば五年で終わるということで、計画を立てました。実際、なんとか計画通りに進んでいます。一体ずつ、ばらばらになったものをもう一度組み上げて、剥落止め処置をして、クリーニングを行って完了です。そういう修復作業を一〇日間で一〇〇体ずつ、五年間やってきました。

このような修復事業をお寺でやっているということを、檀家さん、県内や県外の方々にも周知しました。一〇日間のうちの二時間を、説明会および現地修復の一般公開の時間として設けました。これによって被害状況も修復の内容も知っていただけます。そもそもお像の価値というのは、町指定であつても多くの方が知らないのです、それを間近に見ていただきながら説明することによって関心の喚起を図り、それによって保存につなげていくという活動をしています。同時に、修復した物に一体ずつテグスをかけて、もう一度地震が起きた時に倒れないようにする処置も行っています。これだけでも一つの対策になると思います。

六 震災から二年六カ月後 山形県高島町の某堂

こちらは震災から二年後の活動です。こちらも山形県高島町の小さなお堂です。土蔵造りのお堂で、これが揺れによって傾きました。つつかえ棒をしないと支えられないぐらいの状況になっていて、地区民で管理していたお堂ですが、このままでは倒壊の危険があるということで、建替えをすることになりました。建替えをすると中にあるものを出さないといけないので、同時に調べてくださいということになり、大学の方で依頼を受けて調査を行いました。

この小さなお堂を調べてみたら、大小合わせて一三体の仏像がありました。まずその数に驚きました。地元の方々もお堂の中にあるものは「何だかよく分からない」と、最初は言っていました。「地藏さんみたいなものがある」ということは言っていたのですが、他のものはよく分からないという状況でしたが、これだけの量のお像がありました。一個ずつよく見ると、銘文が記されているものが多くありました。「天明」の銘があったり、香台なのに仏像が載っているという、使い方を間違っていたりするものもありました。ご本尊の薬師様には、少し消えかかっていますでしたが、「寛政」の銘が確認できました。段の上にあつた役行者のお像には、裏にびつしりと銘文が確認されました。それと対になるお像には、求めた値段まで書いてあるという、重要な資料性があることも確認しました。さらに軒下も調べてみると、奉納札が出てきました。ただ、土にまみれて腐食がすすみ、ほぼなくなりかけている状況でした。それを丁寧に掃除して、赤外線をあてて見たら文字が確認できました。地元の方々の名前が記載されていたり、大工の名前が分かったりしました。状態が健全であればもっとちゃんとした情報が確認できたはずす

が、こういう奉納札からも多くの文字情報が確認できました。屋外にある石造物も併せて調べて、多くの物に年号が記されてあることが確認できました。

何が言いたいかという点、こういう小さなお堂にも、しつかり調べてみるとこれだけの情報が詰まっているということ。紙資料以外の木製品のものにもこれだけの銘文がある。単純に時代で重要かどうかを判断するだけではなく、地域資料としても大変重要だということが分かっていくということです。地域の方々はほとんど「何だか分からない」と言っていたものが、調べてみるとこれだけの情報があるので、それをまとめていくと、かつてどのような信仰があったのかとか、いつ誰々が作ったのか、またはその地域の方々のご先祖さんがどのように関わっていたのかということが分かってくる。我々としても大変気付かされることが多い調査でもありました。その成果を講演会またはシンポジウムという形で地域の方々にお伝えして、普段どのように文化財を扱えばいいのかということも併せてお伝えするというワークショップを開きました。

七 震災から八年後―岩手県陸前高田市立博物館―

最後に、現在取り組んでいる事例です。震災から八年たった今も、まだレスキュー活動は続いています。これは陸前高田市立博物館での事例です。ご存じの通り、陸前高田も甚大な被害を受けました。津波による浸水被害を受けたのですが、その中でも私が請けているのが木製の算額です。こちら津波で全体が完全に水に浸かりました。紙資料であれば水にそのまま浸からせて、海水の塩分をだんだん抜いていく作業が可能です。しかし木製の算額で

表面に彩色があります。かつてはもつと彩色があつたのですが、被災後もまだ少し色が残っている状況ですので、水に浸すとそれが取れてしまうということで、水に再度浸すことができませんでした。それで、少しずつ水分を与えて紙を貼り、そこに注水して塩分を取っていくという湿布法で、東京国立博物館の方でずっとその作業をされ、八年という歳月がかかりました。

ようやくほぼ塩分が抜けきつたので、ここから本格修復が検討されたわけですが、欠失した部分を復して、元々あつた形に形状を復元したいとの町の意向がありました。ただ、被災でこのようになった状況というのは、事実として受け入れざるを得ないので、その状況を残す形での修復を検討しました。写真14のような感じで、部材が割れてばらばらの状況になっています。

依頼者の町と協議し、額の形状に復しつつ、被災した痕跡は残し、過度な復元はしない、欠損部を現存資料や写真などを参考にして3Dデータ上で復元し、形状の復元を図るといふ修復方針を考えました。現在、3Dデータを活用して、欠失した部分を残存部材と写真の資料を基にデータ上で復元して、それを3D削作機で立体化して、残存部材に組み込んでいくという修復を行っています。二〇二〇年度中には完成する予定ですが、またどういふ修復になったかというのはどこかでご報告できたらと思つています。被災に対する対応の報告は以上です。

まとめ

さまざまな事例を、六例報告させていただきました。東日本大震災で被災した指定文化財や公的機関にあつたも

のは、被災後、比較的迅速に対応することができました。それはもちろん多くの方々のご尽力のおかげですし、全国的なネットワーク、文化庁の被災文化財等救済委員会や文化財保存修復学会、または全国美術館会議等の全国的な活動組織など、阪神大震災以降に設立されたそういう組織がうまく機能したことによつて情報共有ができたことで、今回の対応ができたわけです。

一方で、できなかったことも多くあったことを痛感しました。それが未指定文化財への対応です。まず、被害状況の把握すら、実は結構できていない。特に津波被害だと、根こそぎ持っていかれてしまったので、元々何があったのかが把握されていない状況で津波が起きると、何がなくなつたということすら分からない。それが東北で起きた現象でした。東日本大震災では多くの方々の人命が失われましたが、それはどこに誰が住んでいたのかが分かつていたから把握できたわけですが、文化財の場合もそれを把握しておかないと、気付いたらその町の歴史を象徴するものが、ある日突然になくなるという事態になるのではないかという危機感を抱きました。

また、先ほどの芸工大の学生の話ではないですが、未指定文化財が壊れてしまった時にどこに相談していいのか分からない。公的なものであれば行政に相談したら何とかしてくれるのですが、特に仏像などは、政教分離で指定になっていないものは補助しないというのが今の日本の考え方ですので、自力で何とかするしかないという状況です。せめて相談できる場所があればもう少し状況は変わってくるのではないかと思うのですが、そういう場所もなかったというのが、結構つらいことだと思いました。

もう一つは費用です。そういうものを修復したいけれども、そのお金がないというのも切実な問題だと感じました。未指定文化財の修復費用の確保というのも今後の大きな課題であると思います。先ほどの加藤規博さんのお話にあった通り、まず現状を把握することが大切です。仏像の場合に限って言うとう、やはり美術史的な価値に基づい

て価値判断が下されます。しかし、古いものやみんなが大事だと思っっている鎌倉や平安につくられたものはしっかりと把握されるのですが、近世、近代のものは価値がまだ定まっていなくて、調査してもリストに載ってこないという現状があります。けれども、そういうものにも銘文がたくさんあって、本当に町の歴史そのものの資料になり得るものが多くあるのです。しかし、そういうものが把握できていないというのが今の問題だと感じます。実際に町にあるものの約八割が近世のものと言っても間違いのないと思います。その八割がなくなると、町の歴史が分からなくなるといことが起こり得るのです。同時に、そういうものを把握しつつ、どこに何があつて、このままだと壊れそうだということもある程度は把握すべきです。

あとは、その情報の共有です。調べたものを共有していくことが大事です。山形県内においては、芸工大を離職した後も独立後に各市町村の調査をさせていただいて、それらを私どもとそれのお寺の所有者の方々と教育委員会と三カ所と同じデータを共有しています。それは、被災した時に教育委員会、役場そのものが被災してしまうということも実際に起きていますので、その時に一つの所にしか情報がないと、そこでなくなったら終わりです。複数でそれを共有しておくことも大事だと思います。実際にそれが起きた時に、山形には防災ネットワークがありますので、そちらと連絡を取りながら対応することができます。山形においてはそれなりの対策と対応が今後できるので、はないかと思っています。

愛知県は、これから動き始めるということでしょうけれども、まさに先ほどの悉皆調査の情報を生かしつつ、近世、近代のものにも対応していくべきかと思えます。また、ネットワークを構築し、全国的なものとなげていく必要もあります。何よりも、三〇年以内に南海トラフが起きると言われていて、今、起こってもおかしくないような状況があるわけです。実際に今起こったら大パニックになります。特に沿岸地域の津波の被害が想定される場所

では、今の状態で起きると根こそぎなくなってしまう危険性があるので、一刻も早く、津波の被害が想定されている地域からでも、何かあるのかというような悉皆調査を実践すべきだと思います。ネットワークの構築も急ぐべきだと思います。

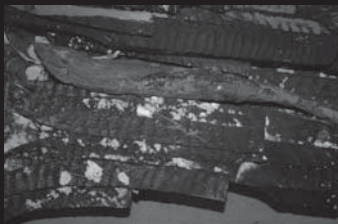
今日は災害が起きた後の対応が中心の報告となりましたが、起きてからでは遅いのです。起きる前、つまり平時の時に何をしておくかが最も重要ではないかと感じる次第です。以上で私の報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

(おかだ・やすし 一般社団法人木文研、帝京大学文化財研究所)

石巻文化センター 収蔵作品の被害 状況



被災から2か月経っても海水で濡れた状態の木製作品



近隣の製紙工場から流出したパルプが付着

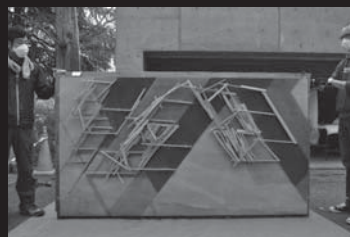


ヘドロや砂が付着

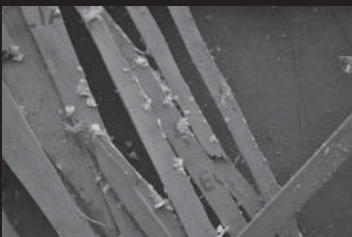
写真1



海水に浸かった後、収蔵箱に発生したカビ



ケース内の作品本体にもカビが発生



パルプや砂が付着



木部の折れや打痕

写真2

被災後の対応 事例1



パルプや砂を刷毛やエアースラストで除去



パルプや砂を刷毛や竹串で除去



スチームによる殺菌



エタノールや防腐剤(TBZ)を噴霧

写真3

被災後の対応 事例2



木製作品の含水率を計測



吸湿性の高い紙で包む

新しい段ボールに収め、風通しのよい室内に保管



応急処置を終えた彫刻作品は、その後東北芸術工科大学に移送し、
美術史・文化財保存修復学科(立体作品修復ゼミ:藤原徹教授)にて教育研究資料として本格的修復を实践

写真4



高台に建つ観音堂

観音堂から望む被災地



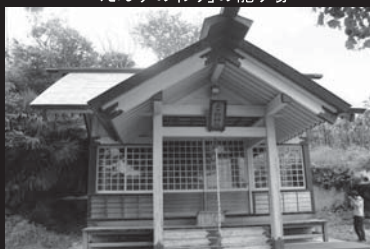
写真5



「えんずのわり」の籠り場



観音堂



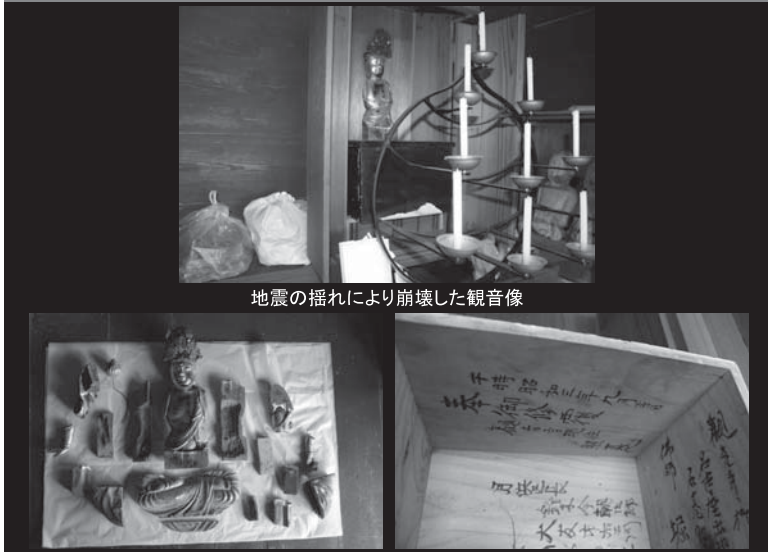
高台に建つ神社



高台に建つ神社にまで達した津波

写真6

災害後の対応 事例 3



被災後の対応 事例 3



被災後の対応 事例3



現地での4日間の修復が完了



写真9

被災後の対応 事例4

地震の揺れにより上段から立像が落下



写真10

被災後の対応 事例 4



写真 11

被災後の対応 事例 4



写真 12



修復前(被災直後)



修復後

写真 13



陸前高田
市立博物館所蔵



木製
算額



写真 14